

教育実践開発コース

古川 弘基

私は、本学部の国語科から進学しました。教職大学院への進学を考えたきっかけは2つあります。1つは教員採用試験で結果が実らなかったことと、もう1つは、4年次の実習等で実感した授業研究の奥深さと己の指導力の圧倒的な至らなさです。教壇に立つ自信も、現場に出てもまれようという踏ん切りもつかなかった私は、自分と向き合う中で足りないものを探る時間が必要だと感じ、大学院で学び続ける決意をしました。両親には「結果は出す。あと2年学ばせてほしい。」と頭を下げて、進学することを認めてもらいました。

大学院での学びは、「理論と実践の往還」を大切にされていて、学んだ翌日に現場に生かせるようなエッセンスが詰まっています。学部の実習との大きな違いは、研究の視点をもって子供たちに携わっていることだと思います。そうした中で、「気付く」ことがたくさんあり、様々なことが「よく見える」ようになりました。大学院の講義で学んだ理論的な視点は、実習に行った時には度の合ったメガネのように様々なものが見えるようにし、省察をより深いものにしてくれました。

また、実践研究においては、学部生の時にお世話になった先生が相談に乗ってくださり、つながりのありがたさをとても感じています。大学院生全員を、教員全体で見ていくという温かい雰囲気も大きな魅力だと思います。

今では現場に立ちたいという思いがあふれています。ここでの学びを、これから出会う子供たちのために、役立てていこうと思います。